

フィールド探究部の巨樹調査

環境省は、胸の高さ（1m30cm）の幹周りが3メートル以上である樹木を「巨樹」と定めている。フィールド探究部では2018年から丹後半島に残る巨樹の調査を始め、5年間で61種3,171本の巨樹を確認した。他の都道府県と比べると、京都府の本数は茨城県に次いで全国3位。しかも府内の巨樹のうち8割が丹後にあることになる。与謝野町内では324本を確認。神社やお寺などに多く、樹種の半数以上がシイの木だった。



大虫神社（温江）のスダジイ（2019年11月）



神宮寺のコウヤマキ。本堂の火災で延焼しても力強く生きている（2022年8月）



物部神社のスダジイを調査するフィールド探究部の部員たち（2019年3月）



第4話

丹後の森3000本の巨樹を訪ねて

見慣れた山が違って見える

大江山連峰に抱かれる与謝野町。私が生まれ育った近所には物部神社がある。石川地区の氏神で、私は氏子の一人。4月末にある加悦谷祭ではここから出発し、神楽や太刀振り奉納しながら区内を巡る。物部神社の境内は目を閉じてみても浮かぶほど慣れ親しんできた。フィールド探究部で巨樹調査を始めたのは1年生の秋。神社の森にも大きな木がけっこうある。地元の物部神社も調べてみることにした。訪れてみると、そこには目を見張るほどの巨樹が群生していた。「こんなでかい木があったのか」。仲間と幹周りを測りながら私は何度もつぶやいた。春祭りでいつも見ている景色ははずなのに、

小さいころとは見ている景色が違うように思えた。それからは山を歩く然と眺めるのではなく、「でかい木ないかな」と目を凝らすようになった。与謝野町全域を調査する中で、印象深い巨樹が2本あった。まずは、旧桑飼小学校にあるシイの木。幹周りは8メートルを超える。学校沿いの国道176号からもプロックリのように枝葉を広げた姿が見える。学校ができる前からあるらしく、木の下は地域の人々の憩いの場にもなっていたという。校庭になってからは子どもたちに木陰を作り、遊ぶ姿を見守ってきた。学校は取り壊されたが、シイの木は今も人々の暮ら



滝のツバキを訪れ、学芸員から説明を受ける部員たち（2022年4月）

大切なものは日常の中に

今日のライター



おおた けんとう
太田 健斗
2020年度卒業生
(江陽中出身)

こうして文章を書いていると、懐かしさが込み上げてきました。フィールド探究部での活動は1年半くらいでしたが、そこで私は巨樹を見つけるレンズを手に入れました。元々あったのかもしれませんが、丹後の巨樹を探し、地元の方々に巨樹との思い出を覚えてもらう中で、そのレンズは磨かれていきました。見えているようで、見えていない。日常の中に、実は大切なものがあるのかもしれない。私の気づきと与謝野町の皆さんに届けることができました。この記事が、あなたのレンズを研ぎ澄ますきっかけになればうれしいです。

延焼しても強く生きる姿に自分を重ね合わせていた。
土の感触漂う匂い
神社の森の思ひ出は温かい
私は4月から大学に通っている。大阪府の中部に住んでいるので、周りにはコンクリートのジャングルのようだ。緑はほとんどない。今回、「巨樹調査の特集を書いてみないか」と誘ってもらい、巨樹を求めて丹後を巡った記憶をたどっていると、土や草を踏みしめたときの感触や、森に漂う匂いを思い出した。特に与謝野町の巨樹の記憶には「温かみ」がある。生まれ育ったぬくもり。巨樹とともに織りなされてきた暮らしの中で、自然と培われてきたものだ。私は確信している。

宮津天橋高校宮津学舎フィールド探究部の連載は、今月号で終了となります。部員たちは、今も丹後地域をフィールドに活動しており、自らの価値観で魅力を探し続けています。またいつか彼らの学びを発信できる日まで、お楽しみに。

全4回の記事はこちらから▶▶▶

